

「日台大辞典緒言」について

中澤 信幸

(文化システム専攻言語科学領域担当)

はじめに

日本統治期台湾においては、台湾語と日本語との対訳辞書、また単語集や会話書などが多数編纂された。それだけ、統治においては台湾語学習が、日本語教育とともに重視されていたのである。

その日本統治期における対訳辞書の、代表作の一つが『日台大辞典』(1907, 明治40年刊)である。この冒頭に掲載される「日台大辞典緒言」(以下「緒言」と略称)は、台湾語のみならず中国語諸方言、朝鮮・ベトナム漢字音も含めた精緻な対照研究となっている。とはいえ、こんにちに至るまで、この「緒言」に関する十分な検証はなされていないのが実情である。本研究は、この「緒言」の記述内容を検証し、さらに研究史上への位置付けをも試みるものである。

1 『日台大辞典』と「緒言」

1.1 『日台大辞典』

日清戦争終結後の1895(明治28)年、日本が台湾を植民地統治することになったが、そこで現地台湾語(閩南語)を研究する必要に迫られることになった。そして、以後の約40年の間に、台湾総督府を中心として、以下のような対訳辞書が編纂されることになった。

- 『日台小字典』—上田万年・小川尚義主編。台湾総督府民政部学務課発行。1898(明治31)年刊。
- 『日台新辞典』—杉房之助編。日本物産合資会社支店発行。1904(明治37)年刊。
- 『日台大辞典』—小川尚義主編。台湾総督府民政部総務局学務課発行。1907(明治40)年刊。
- 『日台小辞典』—小川尚義主編。大日本図書株

式会社発行。1908(明治41)年刊。

- 『台日新辞書』—東方孝義編。台湾総督府警務局内台湾警察協会発行。1931(昭和6)年刊。
- 『台日大辞典』—小川尚義主編。台湾総督府発行。1931~32(昭和6~7)年刊。
- 『台日小辞典』—台湾総督府編・発行。1932(昭和7)年刊。
- 『新訂日台大辞典』上巻—小川尚義主編。台湾総督府。1938(昭和13)年刊。

これらの辞書の中でも代表的なものが『日台大辞典』と『台日大辞典』で、いずれも台湾総督府の編修官だった小川尚義(後に台北帝国大学教授)の主編によるものである¹。

1.2 『日台大辞典』の構成と「緒言」

『日台大辞典』では冒頭に伊藤博文による題字、台湾総督府民政長官の後藤新平による序文が付けられ、その後「台湾言語分布図」「台湾語数詞比較表」が続く。それに続くのが「緒言」で、212ページにわたる膨大なものである。この「緒言」の執筆者は特に記されていないが、編纂者である小川尚義によるものと考えられる。

その後「台湾語ノ発音」(18ページ)が付けられ、「凡例」の後に本編である「日台大辞典」(1184ページ)が続く。その後「画引日台字音便覧」(66ページ)

¹ 『日台大辞典』は明治時代の刊行である上に、復刊などもなされていないため、現在では入手は極めて困難である。本稿では筑波大学附属図書館蔵本による。本書はまた国立国会図書館のWebサイト、および台湾のWebサイト「台語文記憶」でも閲覧は可能である。台湾では1993年に武陵出版より複製が出されている。『台日大辞典』については、1983年に国書刊行会より『台湾語大辞典』として複製が出されている。なお、これらの対訳辞書については、村上嘉英(1966)および(2004)参照。

が付けられ², 「百家姓」「台湾地名」「旧台湾度量衡 附貨幣, 時間」「血族ニ対スル称呼」と続き, 最後に小川尚義による「本書編纂ノ顛末」で終わる³。

2 「日台大辞典緒言」の構成

前述の通り, 「緒言」は全部で212ページにわたるが, その構成は次の通りである。

第一章 台湾ニ於ケル言語

第二章 支那ニ於ケル言語

第三章 台湾ニ於ケル支那語

第一項 客人語

第二項 南部福建語

第一欸 南部福建語ノ特徴

第二欸 讀書音ト俗音

第三欸 南部福建語ノ方言

第一節 漳州語及ビ此ニ類似セル方言

第二節 泉州語及ビ此ニ類似セル方言

以下, 各章の内容について見ていく。

2. 1 「台湾ニ於ケル言語」

冒頭 pp. 1-2 において, 「第一章 台湾ニ於ケル言語」と題して, 台湾で使用される言語について概観している。すなわち, 台湾では「大別シテ漳州語, 泉州語, 客人語 (又ハ広東語) 及ビ蕃語ノ四種」が使用されているとする。「漳州語」「泉州語」はいずれも福建省南部の言語 (閩南語) を指し, 「客人語」は広東省出自の客家語, 「蕃語」は台湾原住民⁴ 諸語を指す。

そして, それぞれの言語の使用人数を次のように示す。

一. 日本語 五〇, 〇〇〇^人,

二. 支那語

1. 南部福建語

ア. 漳州語 一, 二〇〇, 〇〇〇,

イ. 泉州語 一, 一〇〇, 〇〇〇,

2. 客人語 (又ハ広東語) 五〇〇, 〇〇〇,

3. 其他ノ支那語 四〇, 〇〇〇,

三. 蕃語

1. 熟蕃語 一〇, 〇〇〇,

2. 生蕃語 一〇〇, 〇〇〇,

三, 〇〇〇, 〇〇〇,

(「緒言」 pp. 1-2)⁵

これを承けて, 「現今台湾ニ行ハル、主要ナル言語ハ, 漳州, 泉州ノ二語ニシテ, 之ニ次グモノハ客人語タルコトヲ知ルベシ」とする。そして, この3種の言語の中国語における地位を知るためには, 「先ヅ支那ニ於ケル言語ノ一般ヲ知ルコトヲ要ス」とする。

2. 2 「支那ニ於ケル言語」

第一章に続く pp. 2-4 において, 「第二章 支那ニ於ケル言語」と題して, 中国大陸における言語について述べる。まず「支那語」を挙げるが, これはもちろん中国語のことである。その特徴として, 「^{アイソレエテット}孤立語, 又ハ^{モノシラビック}単音節語ト称スル語種ニ属ス」と述べる。

そして, 「此類ノ言語ハ, 支那語以外ニ於テハ, 安南, 暹羅, 麵甸, 西藏等ノ語, 皆之ニ属ス, 学者此ノ一群ヲ総称シテ印度支那語系トイフ」と述べる。この「安南」はベトナム, 「暹羅」(シャム) はタイ, 「麵甸」はミャンマー (ビルマ), 「西藏」はチベットをそれぞれ指す。「印度支那語系」は, こんにちの言語学で言うところの「シナ・チベット語族」を指すものと考えられる。

次に「支那語以外ノ言語」として, 「西藏語」(「印度支那語系」)「蒙古語」「滿州語」「土耳其語」(「ウラル, アルタイ語系」)を挙げる。「蒙古」はモンゴル, 「土耳其」はトルコのことである。

² 「日台字音便覧」については, 中澤 (2010) 参照。

³ 『日台大辞典』では, 漢字はすべて旧字体で記されているが, 本稿では便宜上新字体に改めて示す。(以下同じ。)

⁴ 台湾はもとオーストロネシア語族の人たちがすむ島であり, 漢族が移住したのは16世紀以降である。以後, オーストロネシア語族の人たちは, 時代によって「蕃族」「高砂族」「高山族」などと呼ばれてきた。現在は自ら「原住民」と呼称している。(「先住民」ではすでに滅んでしまった民族となるため, この呼称は避けられる。)

⁵ 原文は縦書きで, また読点はすべてテン(、)である。(以下同じ。)

その後、「四川、雲南、貴州、広西、広東等ノ諸省、及び海南島ニ於テハ、幾多ノ蕃語ノ点在セルヲ見ル、此等ノ蕃語ニ関シテハ、未ダ詳細ノ研究アラザレトモ、要スルニ、少クモ印度支那語系ノ範圍ニ属スルモノ、如シ」と述べる。この「蕃語」は、少数民族の言語を指すものと考えられる。

そして、「支那語ノ分類」として、「モヨルレンドルフ⁶」の分類に基づき、次のように示す。

- 一. 官話 (北部, 南部, 西部)
三〇〇, 〇〇〇, 〇〇〇^人,
- 二. 呉語
 1. 蘇州上海語 一八, 〇〇〇, 〇〇〇,
 2. 寧波語 二五, 〇〇〇, 〇〇〇,
 3. 温州語 一, 〇〇〇, 〇〇〇,
- 三. 閩語
 1. 南部福建語 (廈門語族)
一〇, 〇〇〇, 〇〇〇,
 2. 福州語 五, 〇〇〇, 〇〇〇,
 3. 汕頭語 五, 〇〇〇, 〇〇〇,
- 四. 粵語
 1. 広州語 (欧人の所謂広東語)
一五, 〇〇〇, 〇〇〇,
 2. 客人語 (本島に所謂広東語)
五, 〇〇〇, 〇〇〇,
三八四, 〇〇〇, 〇〇〇,

(「緒言」 pp. 3-4)

その後、「支那人」は外国に移住する者が多いことを延べ、その移住先として「交趾支那」「新嘉坡」「ジャバ」「スマトラ」「サンフランシスコ」「ホノル、」「濠太利亚」「馬尼刺」等を挙げる。これら外国の地においても「支那語」が話されることを述べる。「交趾支那」はフランス領コーチシナ、「新嘉坡」はシンガポール、「ジャバ」はインドネシアのジャワ島、「濠太利亚」はオーストラリア、「馬尼刺」はフィリピンのマニラをそれぞれ指す。

最後に「支那ノ文字、即チ所謂漢字」について、

⁶ ドイツの言語学者・外交官であったメレンドルフ (Paul Georg von Möllendorff, 1847~1901) を指すものと考えられる。

「其ノ発音ニ於テハ多少ノ相違アレドモ、文字トシテハ、日本、朝鮮、安南ニ於テ広く使用セラル、ヲ見ル」と述べる。

2. 3 「台湾ニ於ケル支那語」

p. 4 以降、「第三章 台湾ニ於ケル支那語」と題して、順次その詳細を述べていく。台湾で使用される「支那語」は、「南部福建語」と「客人語」であるが、「客人語」は本書の主とするところではないので、「客人語ニ関シテハ、今ハ只其概略ヲ挙ゲ、南部福建語ニ関シテ、以下漸次之ヲ詳説スベシ」と述べる。

2. 3. 1 「客人語」

p. 4 から p. 5 にかけて、「第一項 客人語」として、その概略を述べる。前述の通り、「客人語」とは、こんにち言うところの「客家語」を指す⁷。ここで「客人語ハ通例、広東語、又ハ、客話ト称スルモノナルガ」と述べ、また「歐洲人ノ所謂、広東語、即チ広州府地方ノ言語トハ同一ノモノニハアラズ、故ニ爰ニハ混同ヲ避ケンガ為ニ、甲ヲ称シテ客人語トシ、乙ヲ称シテ広州語トシ、故ラニ広東語ノ名ヲ用キズ」と述べる。当時の台湾では客家語のことを「広東語」とも称していたが、これでは広州で話される広東語 (粵語) と混同してしまうために、ここでは「広東語」の名称は用いず、「客人語」「広州語」として区別するというのである。

「本島」(台湾) における「客人語」の範囲として、「新竹、苗栗、台中、阿緱ノ地方ヲ最モ多シトス、而シテ其ノ分布ノ地域ハ、遠ク海岸ヲ離レ、中央山脈ニ接近セル地方ニ属ス」と述べる。「阿緱」は現在の屏東を指す。

また、「支那」においては「広東省ノ東部嘉応州ヲ主トシ、其ヨリ西シテ省ノ中部ヲ横断シ、広州府ノ北部ヲ経テ広西省ニ至レリ」と述べる。「嘉応州」は現在の梅州市梅县区、「広西省」は現在の広西チワン族自治区を指す。

⁷ 現代台湾では「客語」とも表記される。

最後に、「客人語」と「広州語」との違いについて、数詞の例を挙げて示す。

	一,	二,	三,	四,	五,
客人語	yit	ngi	sam	sz	ng
広州語	yêt	i	sam	sz	ng
	六,	七,	八,	九,	十,
客人語	luk	ts'it	pat	kiu	ship
広州語	luk	ts'êt	pat	kau	shap

(「緒言」 p.5)⁸

2. 3. 2 「南部福建語」

p.5 以降, 「第二項 南部福建語」として, その詳細について述べていく。まず「南部福建語」は「厦門語族」とも称することを述べる。そして, 通常はこれを小別して, 「厦門語」「泉州語」「漳州語」の3種類とすることを述べる。その上で, 「其中本島ニ在テ, 最モ広ク行ハル、モノハ, 泉州, 漳州ノ二語ニシテ, 厦門語ニ至テハ甚ダ稀ナリ」と述べる。つまり, 台湾においては「泉州語」「漳州語」が広く使われているというのである。そして, 「泉州語」は主として海岸地方に多く, 「漳州語」は少し海岸を離れた内部地方に多いとする。

「支那」においては, その名の示すとおり福建省の南部で使われ, 「厦門語」は厦門付近, 「漳州語」は漳州, 龍巖の地方, 「泉州語」は泉州, 永春の地方で使われるとする。

その上で, 次のように述べる。

此等三種ノ言語ハ, 其相違スル所, 只微細ナル方言的ノ差異ニ止マリ, 決シテ難解ノ患アルコトナク, 就中厦門語ニ於テハ, 厦門ガ地理上, 泉州, 漳州ノ中間ニアルガ如ク, 其言語ノ特徴, 亦泉州, 漳州二語ノ中間ニ位スルヲ以テ, 南部福建語ノ特徴ハ, 厦門語ノ特徴ヲ見テ其ノ大体ヲ知ルコトヲ得ルナリ,

(「緒言」 p.5)

すなわち, 厦門は泉州, 漳州の中間に位置する

ので, 「厦門語」の特徴も「泉州語」「漳州語」の中間の性格を有している, だから「南部福建語」の特徴は「厦門語」を見ればだいたいわかる, というのである。

そこで, まずは「厦門語」の特徴, 特に「支那語ニ於ケル語形上ノ関係」と述べ, 次に「泉州語」および「漳州語」と「厦門語」との関係を詳説すると述べる。(この「厦門語」重視の姿勢については, 3.1で後述。)

最後に, 「厦門語」には「読書音」と「俗音」の2種があり, 「読書音」は通常文章語に用いられ, 「俗音」は俗語に用いられるが, 普通の談話においてもこの2者は混用されることを述べる。そして日本語でも「字音」と「国語」とが混用されているが, 日本語の音訓がもともとは無関係なものであるのに対して, 「読書音」と「俗音」はともに近似するものであり, 「俗音ハ読書音ノ転訛シタルモノト見ルコトヲ得ベシ」と述べる。そして次の例を挙げる。

	歌,	人,	水,
読書音	ko	jin	sui
俗音	koa	lang	tsui

	百,	東,	田,
読書音	piek	tong	tien
俗音	pah	tang	ts'an

(「緒言」 p.6)

そして, 「読書音」は比較的古形を残していることから, 「今厦門語ノ読書音ヲ標準トシ, 以下其特征ヲ列記スヘシ」と述べる。

この「読書音」は, こんにち言うところの「文言音」, 俗音はこんにちの「白話音」を指す。ここでは「厦門語」の「読書音」, つまり文言音を標準と見なし, その特徴を列記していくというのである。

2. 3. 2. 1 「南部福建語ノ特徴」

p.6 以降, 「第一款 南部福建語ノ特徴」と題して, その特徴について述べていく。この「第一

⁸ 原文は縦書き1列ずつとなっているが, 本稿では便宜上(横書きで)複数の段にして示す。(以下同じ。)

歟」は p.6 から p.163までの158ページに及んでおり、「緒言」(全212ページ)の大半を占めていると言える部分である。

「南部福建語」, すなわち閩南語の特徴を述べるにあたって、冒頭で次のように述べる。

南部福建語ノ音韻上ノ特徴ヲ研究スルニ当リテハ、勢支那各種ノ語音ヲ比較スル必要アリ、今此等比較ノ基礎トシテ、主トシテ韻鏡ヲ取レリ、蓋シ韻鏡ノ音ハ必ズシモ、支那語ノ最古音ヲ表スルモノニハアラザレドモ、尚其音韻ノ種別ニ於テ頗ル精密ニシテ、比較上、最も便利ナルモノアルヲ以テナリ、

(「緒言」 p.6)

「南部福建語」の音韻の特徴を研究するには、「支那各種ノ語音」(中国語諸方言音)を比較⁹する必要がある。そこで、ここでは比較の基礎として、『韻鏡』を取り上げる、と述べる。(この『韻鏡』利用については、3.2で後述。)

そして、「支那各種ノ言語」のうち、「上海」「南京」「汕頭」語の音は、「ウキリアムス」の辞書により、「福州」「客人」「広州」「温州」「寧波」「朝鮮」および「安南」の語音は、「ジャイルス」の辞書によることを述べる¹⁰。ただし、「廈門音」については、「編者ノ綴字法」によることを述べる。

その後、「一、^{イニシアル}語頭音ノ特徴」として、まず「1. ^{ラビアル}唇音」から、各語音の比較を行っていく。例えば次のような形である。

ア、(p)音、韻鏡「幫」母ニ於ケル(p)音ハ、廈門音ニ在リテモ、主トシテ、亦(p)ノ音ヲ有ス、但シ稀ニ(p')ノ音ヲ有スルモノナキニアラズ。

⁹ 言語学においては、「比較」(同系統の言語の比較)と「対照」(系統にはこだわらない言語の対照)は厳密に区別される。この「緒言」では、それを意図しているのかどうかは不明であるが、漢字音は「同系統の言語音」と見做すことができるため、この「比較」という用語は適切であると言える。

¹⁰ 『日台大辞典』本編に先立つ「凡例」では、「ジャイルス」の辞書として「A Chinese English Dictionary, H. A. Giles」, 「ウキリアムス」の辞書として「漢英韻府 (A Syllabic dictionary of the Chinese Language, S. W. Williams)」の名が挙げられる。

邦^{博江切} 本^{布付切}
漢音ホウ呉音ハウ 漢音ホヌ呉音ホヌ

廈門	pang	pun
福州	poung	pwong
客人	pong	pun
広州	pong	pun
上海	pong	pǎng
温州	poa, boa	pang
寧波	poŋg	pêng
南京	pang	pǎn
北京	pang	pên
朝鮮	pang	pon
安南	bang	ban, boun

波^{博禾切} 博^{補各切}
漢音ハ呉音ハ 漢音ハク呉音ハク

廈門	p'ou	p'ok
福州	p'oa, poa	pauk
客人	po	pok
広州	po	pok
上海	pu	bok
温州	pu	po, bo
寧波	pou	poh
南京	po	poh
北京	po, p'o	po
朝鮮	p'a	pak
安南	ba	bak

(「緒言」 p.7)

このように、「邦」「本」「波」「博」といった漢字に、それぞれ反切、漢音、呉音、そして中国語諸方言音、朝鮮漢字音、ベトナム漢字音が注されるのである。

以下、「イ、(p')音、韻鏡「滂」母」「ウ、(b)音、韻鏡「並」母」「エ、(m)音、韻鏡「明」母」…と、それぞれの項目で具体例を挙げ、各言語音間の比較を行っている。そして「2. ^{デンタル}舌尖音」「3. ^{リングアル}舌尖裏音」…と続き、「一、語頭音ノ特徴」だけで p.7 から p.42までの36ページを費やしている。

その後「二、^{ファイナル}語尾音特徴」(pp.42-54)、「三、

韻ノ特徴」(pp.54-133), 「四, ^{トオン}音調ノ特徴」(pp. 134-147) と続き, それぞれ各言語音間の比較を展開していく。そして p.148からは, 「韻鏡三十六字母定位表」「語頭音比較表」「語尾音比較表」「韻音比較表」と, それまでの検討を一覧表にしたものが続く。

2. 3. 2. 2 「読書音ト俗音」

「第二款 読書音ト俗音」は, p.163から p.193までの31ページを占める。

「厦門音」では, 多くの場合に「読書音」と「俗音」の2種があることを述べ, 「俗音」は普通「読書音」の転訛と見られるが, 時として「俗音」の方に古形を認めることもある, と述べる。(「読書音」と「俗音」については, 「南部福建語」の項の冒頭でも言及している。2. 3. 2参照。)

また, これらの「俗音」は, 一方においては「福州」「汕頭」の「俗音」, および「客人音」と類似するものが少なくないと述べる。そして, ここで「厦門俗音」のおもなるものを挙げ, 「読書音」「客人音」, および「福州」「汕頭」の「俗音」と比較すると述べる。

その後, 「一, 語頭音ノ比較」として, まず「1. 唇音」から, 各語音の比較を行っていく。例えば次のような形である。

ア, 読, (p) ……俗, (p'), 「並」母
 平 pieng, p'iⁿ, H. p'in
 棚 pieng, p'iaⁿ, H. p'ang
 蒲 po, p'o, H. p'u
 部 po, p'ou, H. p'u
 標 piau, p'iau, H. piau, p'iau
 盤 poan, p'oan, H. p'an

(「緒言」 p.164, イタリックは「俗音」, 「H」は「客人音」を表す。)

以下, 「イ, 読, (p) ……俗, (g), (t), 「奉」母」「ウ, 読, (b) ……俗, (m), (n), (hm), 「明」母」「エ, 読, (m) ……俗, (b), (hm), 「明」母」…と, それぞれの項目で具体例を挙げ, 各言語音間の比較を行っている。そして「南部福建語ノ特

徴」の時と同様に, 「2. 舌尖音」「3. 舌根音」…と続けていく。

その後「二, 語尾音ノ比較」, 「三, 韻ノ比較」, 「四, 音調ノ比較」と続き, それぞれ各言語音間の比較を展開していく。これも「南部福建語ノ特徴」の時と同様である。

2. 3. 2. 3 「南部福建語ノ方言」

「第三款 南部福建語ノ方言」は, p.193から「緒言」末尾の p.212までの20ページを占める。

最初に, 「南部福建語」は「厦門語」「漳州語」「泉州語」および「其他之ニ類似スル小方言」から成ることを確認する。そして「今厦門語ヲ標準トシテ, 此等方言ノ特徴ヲ細説スベシ」と述べる。

その後, 「第一節 漳州語及ビ此ニ類似セル方言」(pp.193-205) が続く。まず「一, 漳州語ノ特徴」として, 「厦門語」「泉州語」との比較を行っていく。例えば次のような形である。

1. 「支」韻, 「微」韻, 又ハ, 此等ニ相応セル上声, 去声ノ韻ニ属シ, 厦門俗音ニ (e), 泉州俗音ニ (ö) ノ韻ヲ有スルモノハ, 漳州俗音ニ於テ (oe) ノ韻ヲ有ス。

	吹 (支)	髓 (紙)		
厦門	ts'ui, ts'e	ts'ui, t'se		
泉州	ts'ui, ts'ö	t'sui, t'sö		
漳州	ts'ui, ts'oe	t'sui, t'soe		
	飛 (微)	皮 (支)	被 (眞)	
厦門	hui, pe	p'i, p'e	p'i, p'e	
泉州	hui, pö	p'i, p'ö	p'i, p'ö	
漳州	hui, poe	p'i, p'oe	p'i, p'oe	

	尾 (尾)	未 (未)	
厦門	bi, be	bi, be	
泉州	bi, bö	bi, bö	
漳州	bi, boe	bi, boe	

(「緒言」p.194, イタリックは「俗音」を表す。)¹¹⁾

このように, 『韻鏡』の「韻」ごとに分類した上で,

¹¹⁾ 「t's」はすべてママ。(「ts」の誤りか。)

「漳州語」とその他二つとを比較していくのである。

「漳州語」に続いて、「二、漳浦語ノ特徴」では、「漳浦語」と「厦門語」との比較を行う。最後に「三、其他ノ方言」として、「1. 平和語」「2. 海澄、南靖語」「3. 龍巖語」「4. 長泰語」「5. 詔安語」についても言及する。

次に、「第二節 泉州語及び此ニ類似セル方言」(pp.205-212)が続く。まず「一、泉州語ノ特徴」として、先の「漳州語」の時と同様に、「泉州語」と「厦門語」「漳州語」との比較を行っていく。(ただし、多くは「漳州語ノ特徴…ノ条参照」としている。)

「泉州語」に続いて、「二、同安語ノ特徴」「三、灌口語」と、それぞれ「厦門語」と比較しながら特徴を簡潔に述べる。最後に「四、其他ノ方言」に言及して終わる。

3 「日台大辞典緒言」の学問的姿勢

以上、「緒言」の構成について大まかに見てきた。ここで「緒言」が台湾語に対してどのような姿勢で臨んでいるか、検討していくことにしよう。

3. 1 台湾語音と厦門音

「緒言」では、台湾における言語について、「大別シテ漳州語、泉州語、客人語(又ハ広東語)及び蕃語ノ四種」が使用されているとしていた。

(2. 1で既述。)また、台湾で話される「南部福建語」について、「最モ広く行ハル、モノハ、泉州、漳州ノ二語ニシテ、厦門語ニ至テハ甚ダ稀ナリ」とも述べていた。(2. 3. 2で既述。)

その一方で、「厦門語」については、「厦門ガ地理上、泉州、漳州ノ中間ニアルガ如ク、其言語ノ特徴、亦泉州、漳州二語ノ中間ニ位スルヲ以テ、南部福建語ノ特徴ハ、厦門語ノ特徴ヲ見テ其ノ大体ヲ知ルコトヲ得ルナリ」、つまり厦門は泉州、漳州の中間に位置するので、「厦門語」の特徴も「泉州語」「漳州語」の中間の性格を有している、だから「南部福建語」の特徴は「厦門語」を見ればだいたいわかる、と述べていた。(2. 3. 2で既述。)

ここに『日台大辞典』の編纂者、具体的には小

川尚義の「厦門語」重視の姿勢が見て取れる。台湾では「泉州語」「漳州語」が広く使われているということであるが、これは台湾にいる漢族の多くが、福建省の泉州および漳州を出自としていることに由来する。

厦門は地理的に泉州と漳州の間に位置し、言語としても泉州と漳州の中間の性格を持つということ、小川が「南部福建語」を知る上で「厦門語」を重視したことは理解できる。また、『日台大辞典』自体が、もともと「マゴワン」(J. MacGowan)の『英厦辞典』(English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect)、および「ダウグラス」(C. Douglas)の『厦英辞典』(Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy)を日本語に訳すことによって編纂された辞書であり¹²、それを考えると自ずと「厦門語」重視にならざるを得ない。

とはいえ、「厦門語」は少なくとも台湾で話されている言語とは言えず、これをもって「台湾における言語の研究」というのは、ややこじつけの感がある。小川のこの「厦門語重視」という姿勢は、後世批判の対象となるのである¹³。

¹² 『日台大辞典』巻末「本書編纂ノ顛末」(小川尚義執筆)による。また村上(1966)(2004)および中澤(2010)参照。

¹³ 王育徳(1968)は、『日台大辞典』『台日大辞典』において「厦門音」を「漳州音」「泉州音」の代表とさせていることについて、次のように述べて批判する。

台湾に渡ってきた開拓民は、地理的な関係で、漳州府と泉州府出身者が圧倒的に多い。それが各地でいり乱れて共同生活することを余儀なくされた。この特殊な社会現象が言語の上に反映しないはずはない。

この事情は厦門と似たものがある。厦門も背後地の漳州と泉州から人が集まってきているので、「不漳不泉」が特徴になっている。それで日本人研究者の中には、厦門音をもって台湾語を表記するという態度の人も出るぐらいであるが、これは正しい認識を欠いている。

同じ「不漳不泉」であっても、台湾語は厦門方言が直輸入されたものではないことを、念を押しておく必要がある。また厦門は‘点’に過ぎないが、台湾は‘面’であるから、その「不漳不泉」の複雑さは、到底厦門の比ではない。(pp.20-21)

また、洪惟仁(1993)は、『日台大辞典』付載の「日台字音便覧」について、次のように批判する。

後附〈日臺字音便覧〉羅列漢字的日語吳音・漢音・俗音及閩南語厦門・漳州的文白異讀，是閩南語漢字音讀的重要史料。只可惜未能列出泉州音，否則價值當更高。

3. 2 『韻鏡』利用

「緒言」では、「南部福建語」の音韻の特徴を研究するにあたって、中国語諸方言音との比較を行っていたが、その比較の基礎として『韻鏡』を利用していた。（2. 3. 2. 1で既述。）

『韻鏡』は中国の唐末・五代頃に作られたものと推定され、南宋の1161年に張麟之によって刊行されている。日本では信範（1223～1286または1287）によって初めて注釈された。江戸時代にはこの書は大流行となり、幾多もの版本が出された。また文雄『磨光韻鏡』（1744、延享元年刊）、太田全斎『漢呉音図』（1815、文化12年成）など、多くの研究書も出版されている。これらの研究は明治時代になっても受け継がれ、実際に『日台大辞典』でも「又漢呉ノ仮名遣ハ、主トシテ太田方氏ノ漢呉音図ニ拠リタレドモ、多少ノ変更ヲナセル処アリ」（「凡例」p.6）と述べられるなど、太田方（＝全斎）の『漢呉音図』が参照されている。この『日台大辞典』では、『韻鏡』を利用して中国語諸方言の分析を行っているという点で、『韻鏡』研究史上でも特筆されるべきものと言える。

「緒言」でも「韻鏡ノ音ハ必ズシモ、支那語ノ最古音ヲ表スルモノニハアラザレドモ」と述べているように（2. 3. 2. 1参照）、『韻鏡』は中国語の最古の音を表すものではない。その音韻体系は、おおむね中国語の中古期（六朝、隋、唐時代）の音、すなわち「中古音」によっている。とはいえ、前述のように、『韻鏡』は江戸時代の日本で盛んに研究されていた。また中国語中古音については、清朝期の中国において、中古音を反映した韻書『大宋重修広韻』（『広韻』、北宋・陳彭年ら撰、1008年）の反切をもとに、陳澧（1810～1882）の考案した「反切系聯法」によって、その枠組みがあきらかにされている。「緒言」における『韻鏡』

（後に付載される「日台字音便覧」は、漢字の日本呉音・漢音・俗音および閩南語廈門・漳州の文言音と白話音の異読を羅列しており、これは閩南語の漢字音読の重要な史料である。ただ残念なことに泉州音を載せていない。これがあればさらに史料の価値は高まったはずである。）

利用も、これら日中双方の研究の流れの中に位置付けられるものである。

なお、「緒言」では、「南部福建語」の特徴を述べるにあたって、「邦^{博江切}」「本^{布付切}」「波^{博禾切}」「博^{補各切}」のように、反切を掲載していた。（2. 3. 2. 1参照。）これらの反切は、『広韻』の反切、およびそれに基づく文雄『磨光韻鏡』の反切と一致する。反切の出典は明示されていないが、小川尚義がこれらの書を見ていたのはあきらかであろう。

3. 3 中国語諸方言音

「緒言」では、「南部福建語」の音韻の特徴を研究するには、「支那各種ノ語音」を比較する必要があるとしていた。そして実際に「厦門」「福州」「客人」「広州」「上海」「温州」「寧波」「南京」「北京」「朝鮮」「安南」といった語音について、『韻鏡』を基礎に比較している。（2. 3. 2. 1参照。）このうち、「厦門」「福州」は中国の閩方言、「客人」は客家方言、「広州」は粵方言、「上海」「温州」「寧波」「南京」は呉方言、「北京」は北方方言に属する¹⁴。（「安南」がベトナムを指すことは、2. 2で既述。）

この手法は、中国語中古音の音価推定の手法を想起させる。すなわち、中古音の音価推定にあたっては、「反切系聯法」によって導き出された枠組みや、『韻鏡』の枠組みに、現代中国語諸方言音、さらには外国借音（日本漢字音、朝鮮漢字音、ベトナム漢字音）を当てはめるという手法を採る¹⁵。『日台大辞典』の編者である小川尚義が、この音価推定の手法を知っていたのかどうかは定かではないが、当時の研究背景として何らかの関連があったのか、関心が持たれるところである。

¹⁴ 中国語の諸方言については、詹伯慧（1983）参照。

¹⁵ その草分けが、スウェーデンの言語学者カールグレン（Bernhard Karlgren, 1889～1978）であるが、その著『Études sur la Phonologie Chinoise』（1915～1926）の出版は、『日台大辞典』出版よりも後のことである。なお、中古音の音価推定の方法については、李思敬（1987）pp.105-139参照。

3. 4 日本漢字音

「緒言」では、「南部福建語」の音韻の特徴を研究するにあたって、中国語諸方言音とともに日本漢字音（漢音・呉音）も掲載していた。

（2. 3. 2. 1 参照。）

日本漢字音は平安時代以来仮名で記され、漢音はおもに漢籍読書の場や儒学において、呉音はおもに仏教教学において伝承されてきた。ところが、江戸時代に入ると、『韻鏡』を利用した、漢音・呉音の人為的な整備が行われるようになる。これがいわゆる「字音仮名遣い」で、その草分けが前述の文雄『磨光韻鏡』であり、それを受け継いだのが太田全斎『漢呉音図』である。

『日台大辞典』でも『漢呉音図』が参照されているので（3. 2で既述）、この「緒言」の漢音・呉音も「字音仮名遣い」に拠っている可能性が高い。ただし、「邦」については「緒言」では「漢音ホウ」「呉音ハウ」となっていた（2. 3. 2. 1 参照）のに対して、『漢呉音図』では「漢音ハウ」「呉音ホウ」（外転第三開合）と、逆になっている。『日台大辞典』「凡例」では、漢音・呉音については『漢呉音図』に拠るものの、「多少ノ変更ヲナセル処アリ」と述べていた。（3. 2で既述。）小川は『漢呉音図』を参照はするものの、鵜呑みにはしなかったということであろうか¹⁶。

4 「日台大辞典緒言」の意義

ここで、「緒言」の研究史上における位置付け、そして編纂者である小川尚義の学問的背景から、「緒言」の意義について考えてみよう。

4. 1 研究史上の位置付け

まず台湾語研究史上における位置付けであるが、台湾語自体の研究が進んだのが、日本統治期に入ってからのことである。ただし、それ以前からキリスト教の宣教師によって台湾語の学習は行わ

¹⁶ 「字音仮名遣い」の人為的・演繹的な字音整備については、近代に入ってから厳しい批判が加えられる。その先駆けが満田新造（1920）であるが、これは『日台大辞典』出版よりも後のことである。

れており、いわゆる「教会ローマ字」（「白話字」）も考案されている¹⁷。この宣教師たちが築いた基礎の上に、『日台大辞典』、そして「緒言」は成り立ったものと言えるのである。

とはいえ、『日台大辞典』の編纂をもって、台湾語の本格的な研究が始められたことは、間違いない事実と言える¹⁸。

次に、中国語諸方言研究史上の位置付けであるが、「緒言」では先行の辞書を参照して、『韻鏡』の枠組みを用いて比較研究を行っていた。（2. 3. 2. 1で既述。）この手法は、その後盛んに行われた中国語中古音の音価推定における手法を想起させ（3. 3で既述）、何らかの関連性が指摘できるところである。

個別の字音に関する信頼性は検証する必要はあるものの、この研究自体は現代にも通用する、東アジア諸言語の「対照研究」とも言えるものである。

最後に、日本漢字音研究史上の位置付けであるが、「緒言」では太田全斎『漢呉音図』を参照するなど、江戸時代の『韻鏡』研究を応用していた。（3. 2, 3. 4で既述。）

実は、江戸時代の『韻鏡』研究や「字音仮名遣い」研究が、明治時代以降にどのように受け継がれたかは、あまり解明されていない。『日台大辞典』および「緒言」における、日本漢字音に関する記述をつぶさに検証することによって、近代における『韻鏡』研究や「字音仮名遣い」研究の展開を、あきらかにすることが期待できるのである。

¹⁷ 『日台大辞典』が下敷きとしていた『厦英辞典』（3. 1 参照）の編纂者ダグラス（Carstairs Douglas, 1830～1877）は、厦門、台湾で活躍した宣教師である。ダグラスは1860年に台湾での宣教の可能性を調査し、1865年から本格的な宣教を開始したという。赤桐敦（2017）参照。

¹⁸ この認識は台湾側で特に強いようで、2007年9月には台湾で「台湾語言學一百周年國際學術研討會紀念台灣語言學先驅小川尚義教授」と銘打ったシンポジウムが開催されている。同シンポジウムの内容は、『台湾語文研究第四期台湾語言學一百周年國際學術研討會：紀念台灣語言學先驅小川尚義教授論文選集』（台湾語文學會主編、2009）にまとめられている。

4. 2 小川尚義の学問的背景

ここで、『日台大辞典』の主たる編纂者であり、「緒言」の執筆者である(と思われる)、小川尚義(1869~1947)に触れておきたい。小川は台湾語や台湾原住民諸語の研究に従事した言語学者で、最終的には台北帝国大学教授となった人物である。

小川尚義は愛媛県松山に生まれ、1896(明治29)年に帝国大学文科大学(現・東京大学)博言学科を卒業、台湾総督府に勤務する。そこで『日台大辞典』『台日大辞典』等の辞書編纂に携わるとともに、台湾語や台湾原住民諸語の研究に従事した。1928(昭和3)年の台北帝国大学の創立に伴い、文政学部言語学教室講師嘱託となったが、2年後には同教室の教授となる。1936(昭和11)年には、『原語による台湾高砂族伝説集』で帝国学士院(現・日本学士院)より恩賜賞を授与されている¹⁹。

小川尚義は帝国大学文科大学で上田万年(1867~1937)に師事している。上田は帝国大学文科大学でチェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850~1935)に師事し、その後当時言語学の本場であったドイツで学んだ。帰国後帝国大学教授となり、文科大学内に初めて国語研究室を設けた。現代の国語学(日本語学)の「生みの親」というべき人である。小川もこの上田の薫陶を受けている。

一方、小川は大学卒業前に、上田より当時台湾総督府学務部長だった伊沢修二(1851~1917)に紹介され、卒業後台湾に渡ることになる²⁰。伊沢は、台湾語研究や台湾における日本語教育の普及に尽力した人物として著名であるが、小川もまた伊沢によって台湾語研究や台湾の教育に携わるようになった²¹。

小川の学問的背景を考える上で、この生い立ちが重要である。すなわち、小川は師匠である上田

を通じて、まず西洋言語学の素養を身につけていくはずである。それとともに、日本の江戸時代以来の伝統的な漢字音研究(『韻鏡』研究、「字音仮名遣い」研究)も、受け継いでいるものと考えられる。そして台湾語研究や台湾の教育については、伊沢の影響を強く受けているはずである。

『日台大辞典』、およびその「緒言」の性格を考える上では、この小川の学問的背景を十分に踏まえる必要があるだろう。

おわりに

以上、「緒言」の記述内容について検証し、台湾語研究史、中国語諸方言研究史、そして日本漢字音研究史上の位置付けを試みた。そして、編纂者である小川尚義の学問的背景との関係についても、考えてみた。

とはいえ、本稿では十分に検討できなかった問題も、多く残されている。特に(2.3.2.1で取り上げた)「第一欸 南部福建語ノ特徴」以降の部分は、分量も多く内容も多岐にわたる。ここで挙げられた諸言語音をつぶさに検証することで、現代の東アジア諸言語の対照研究への応用も可能となる。これについては、いずれ稿を改めて論じることにはしたい。

引用文献

- 赤桐敦(2017)「19世紀中葉の厦門におけるプロテスタント宣教師による言語教育 ―中国における言語改革の起点として―」、『言語政策』(日本言語政策学会) 13, pp.21-44
- 王育徳(1968)『閩音系研究』, 東京大学博士学位請求論文, 『台湾語音の歴史的研究』所収, 東京: 第一書房, 1987
- 洪惟仁(1993)「日據時代的辭書編纂」, 『閩南語經典辭書彙編7 臺日大辭典〈上卷〉』所収, 台北: 武陵出版有限公司
- 詹伯慧(1983)『現代漢語方言』(樋口靖訳), 東京: 光生館
- 中澤信幸(2010)『日台大辞典』付載「日台字音

¹⁹ 林初梅(2012) pp.614-615。

²⁰ 小川尚義「三十年前の思ひ出」(『台湾教育』272, 1925)。また林初梅(2012) pp.589-590。

²¹ 小川については、中澤(2014)も参照。

- 便覧」について], 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』 7, pp.154-162 (右 pp.1-9)
- 中澤信幸(2014)「小川尚義の著作に見る国語意識」, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』 11, pp.17-31
- 満田新造 (1920) 「「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮字遣は正しからず」, 『國學院雑誌』 26-7, 『中国音韻史論考』 所収, pp.283-289, 東京: 武蔵野書院, 1964
- 村上嘉英 (1966) 「日本人の台湾における閩南語研究」, 『日本文化』(天理大学) 45, pp.62-108
- 村上嘉英 (2004) 「日本人の台湾語学習と研究の事始め 一序に代えて一」, 王順隆編 『新編台日大辞典』 所収, pp.1-20
- 李思敬 (1987) 『音韻のはなし 一中国音韻学の基本知識一』 (慶谷寿信・佐藤進編訳), 東京: 光生館
- 林初梅 (2012) 「言語学者・小川尚義とその時代」, 『小川尚義論文集 復刻版 日本統治時代における台湾諸言語研究』, pp.585-629, 東京: 三元社

A Study of “The Introductory Notes of *Nichi-Tai Daijiten*”

NAKAZAWA Nobuyuki

“*Nichi-Tai Daijiten*”（日台大辞典）, the Japanese-Taiwanese Dictionary published in 1907, is the most famous dictionary in the Japanese colonial period of Taiwan. The introductory notes of this dictionary are fine examples of contrastive research of not only Taiwanese, but also Chinese dialects, Sino-Korean, and Sino-Vietnamese.

These introductory notes are contrastive researches of East-Asian languages which can still be applied today. In addition, by inspecting descriptions about Sino-Japanese in this dictionary and its introductory notes, we will be able to clarify the progress of science concerning “*Inkyo*”（韻鏡）, the Chinese rhyme table, and *Jion-Kanazukai*（字音仮名遣い）, the orthography of Sino-Japanese, in the Meiji period.

Ogawa Naoyoshi（小川尚義, 1869-1947）, the editor in chief of this dictionary, had knowledge of Western linguistics, and inherited his knowledge of Japanese traditional linguistics from the Edo period. He also was engaged in the study of Taiwanese languages and education in the Taiwan colony. In order to understand the significance of this dictionary and its introductory notes, we must also consider the academic background of Ogawa.